

BOAT

Yoshinori Arai



私の人生の中で最も輝かしく
心に残り続けている日々は、忘れもしない。
仲間とともにボートにすべてをかけた
あの4年間である。

42年ぶりの帰還! 「ワイルドローバー4世」奇跡の物語

訪れたメキシコで見た、40年前の記憶に乘せて。今、蘇る熱い思い…。

ボート部 同志社艇友会会長 新井 喜範さん

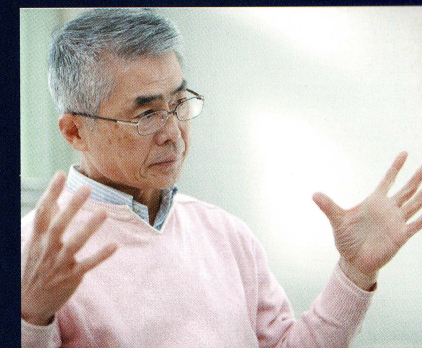
1968年、私たち同志社大学ボート部は全日本選手権で初優勝し、メキシコ五輪に出場した。その青春の記念をもう一度心に刻むため、当時の仲間と60歳になったらメキシコへ行く約束をしていた。3人で思い出の場所をめぐり、メキシコ五輪の際に使用した艇庫を目指した。少しも変わることなく竹む艇庫を目にすると、瞬時にあの頃の興奮が蘇ってきた。懐かしさに心を弾ませながら、艇庫内のボートをゆっくりとひとつひとつ見て回っていたその時だった。「おい、あるぞ!!」そう叫んだ彼のもとに駆けつけると、目の前は「WILD ROVER IV」の文字が、信じられなかった。40年前に自分達の夢を乗せたあの「ワイルドローバー4世」が、少しも姿を変えることなく目の前に現れたのだから。

関東勢が力を持っていた時代、関東の大学として初めて関東の壁を破って日本一になり、オリンピックへの出場も果たした。その時に使用していたボートが「ワイルドローバー4世」である。帰国の際、現地のボート関係者に請われて譲ってしまっただけで、それきり消息はわからなかった。ましてや木製のボート。とくに使用できなくなり破棄されていると思っていた。こうしてかつての戦友と再び出会えたことは奇跡としか言いようがない。自分たちにとっても同志社にとっても記念すべきボートを前に、「持って帰りたいいなあ…」という気持ちが自然とこぼれた。しかし、誰が所有しているかもわからないし、それを調べるためのあても、返還を交渉するつももなかった。



帰国後、一緒にメキシコへは行けなかった当時のチームマネージャーに、ワイルドローバー4世を見つけたことを話した。すると偶然にも彼の甥御さんが仕事でメキシコに駐在しているというのだ。何とかしてワイルドローバー4世を日本に連れ戻したいと甥御さんに協力をお願いしてくれ、その甥御さんも私たちの想いを汲みメキシコで奔走してくれた。現地の会社や学術機関、政府関係者にまで働きかけてくれた。そして、この話を聞いた日本の運送会社も、返還が決まれば即時日本へ運べるようにとメキシコ支社と連携して日本への輸送手配を整えてくれたのだ。全長16メートルのボートはふたつに切断しなければ輸送船に積み込めないことに気を揉んでいると、大津市の造船所の方が日本に着いてからの修復は任せると申し出てくれた。そんなふうにしてこの帰還は、ワイルドローバー4世とのストーリーに心を揺さぶられたたくさんの方々、仕事という枠を越え一肌も二肌も脱いで尽力して下さったことで実現したのである。

新島先生が「WILD ROVER」でアメリカへ渡ったのと同じように、自分たちも「ワイルドローバー」で太平洋を渡るんだ!それがどれほど誇らしく、意義深いものだったのだろうか。オリンピックに出場するということ以上に私たちを高揚させた。その



晴れがましさを胸にメキシコへ乗り込んだが、決戦の地にはそんな高ぶる気持ちと自信を粉々に打ち砕く「高地」という未知の魔物が待ち受けていた。標高2,000mは非常に酸素が薄く、高地対策を一切行っていなかった私たちにはボートなんてとても漕げたものではなかった。結果は無惨にも最下位。本来の力で戦うこともできなかった。

WILD ROVER IV
Miracle Story 1968→2010



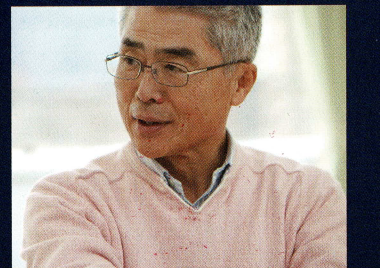
だがその悔しさを経験したからこそ、私たちは強くなった。反省を活かして各国のトレーニングを学び、高地対策以外にも様々な練習を積んだ。やればやるほど経験したことのないようなスピードが出た。もっと速くなりたい、もっともっと速くなりたい。不思議なことに、ひとつの目標にとどまらずさらにその先を目指し続ける食欲を手に入っていた。今度は優勝すること

ではなく、どれだけ速く漕げるかという目標に変わった。敵はライバルチームではない。自分たち自身になったのだ。

スポーツの最大の魅力は「勝つ」こと。ひとつ勝てば、さらにその先の勝ちを目指してそこに打ち込む思いも強くなる。そのために体力をつけ技術を磨いていくうちに、メンタルも鍛えられる。ともに戦う仲間がいれば、チームで勝つことの難しさと喜びも味わうことができる。そのすべてをボート部でのあの4年間が私に経験させてくれた。

ボートがスキルよりも圧倒的にパワーがものをいう競技だということはあまり知られていない。有酸素運動能力が優れているかどうかのポイントなので、未経験の学生であってもその能力が優れていればいきなりナショナルクラスを目指すことも夢ではない。だから、考えるよりもまず一度ボートに乗ってみてほしい。スポーツは自信がないと思っていた人でも、隠れた才能が花開くかもしれない。実は、私自身も大学に入学してからボートを始めた一人である。

ボートという競技、中でもエイトという種目の魅力は、8人の漕手とコックス(舵手)が一体となる「ゾーン」に入る瞬間。ああ今みんな最高に調子が良いな、全員が一番の力を発揮しているな、9人がひとつになっているというパーフェクトな状態が年に数回やってくる。8人で漕いでいると、通常は互いのネガティブな部分がぶつかり合うことで歪み生まれて思うようにはいかない。だから、たとえこのようなゾーンに入れてもほんの数分しか続かないのだ。そんな貴重な瞬間を同じボートに乗り込んだ仲間と一緒に感じることができる。そのボートに乗っている者にしか味わうことのできない一体感をだ。



ボート部は今年創部120年。この伝統ある同志社ボート部の自慢のひとつは、世界中の名門大学と交流を持つことができること。「同志社のボート部です」と名乗れば、東大やハーバードの人だって会ってくれる。同志社大学のボート部には、そんなビッグなネームバリューがある。だから、このネットワークを活かして、積極的に世界へ飛び出し、いろいろなものを見て視野を広げてほしい。それは社会に出てからの人生にも繋がることだと思うから。

今、京田辺にスポーツ資料館を造ろうかという話が持ち上がっている。私の次の目標は、ぜひスポーツ資料館設立を実現させ、そこに「ワイルドローバー4世」を展示し、それを見た若い人たちに夢を描いてもらうことである。私たち、同志社と、ワイルドローバー4世の物語を知ること、世界を見、高い目標を掲げてほしい。大学生というのは、社会に出る前に自分を鍛える時間である。それぞれの「ワイルドローバー」に乗って大海へと漕ぎ出してくれることを願っている。